

『モダン・ペインターズ』考

——自然神学と科学——

横 川 善 正

1680年、ジーン・ダレックス大司教はアルプスのシャモニーを訪れ、呪術によってその万年氷河を800メートルばかりも後退させた、エクソシストとして知られている。その100年後、スイスの博物学者、H. B. Saussure(1740~99)時代までには、もはや、こうした極端な宗教的迷信は蒼い氷河のクレバスの奥へと、「科学」によって放逐されつつあった。しかしながら、18世紀の地質学者達は氷河の構造分析の作業を、ある程度まで神の権能の世話になることなしに行っていたとしても、神学者の聖域を侵害しはせぬかと、相変わらず「科学」の行使については慎重であった。彼等は自分達の視界が、キリスト教の因果律の枠内に限定されたものであることを自認せざるを得なかったのである。従って、彼等の態度は、自然の神秘などに直面した時、地質学者としてはひたすら沈黙すべしとまではゆかなくとも、はるか彼岸を目指しながら、という条件付きの科学的態度なのであった。

スイスの山頂で、万能学者Conrad Gesner (1516~1565) が思索にふけてからというもの、アルプスの地質文学者は決して、「偉大な創造主^{アーキテクト}」について口を閉ざしていたのではなく、むしろ、科学的証拠群によって、その物語りの堅牢さを増していったと言った方が正しい。アルプスの山々は「主」の劇場であり、崖、岩、峰、氷河の割目などはいずれも欠くことの出来ない舞台装置となる。ソシュールのなかにも、自然美への親しみと崇拜を物語る、雄弁な章句が数多く見出されることから解るように、18世紀に生まれた科学と宗教との調和が、19世紀初頭までは自然神学のなかでも主として地質学者によって生き残ってきたのである。ここで忘れてはならないことは、ソシュールの論文が出版された18世

紀後半といえは、引剥がされた宗教が唯物論科学の直接的な挑戦を受けた時代であり、さらにルソーの「エミール」と「社会契約論」が出版の同年の1762年に焼かれた町ジュネーヴにおいて、ソシュールがアカデミーで哲学教授の立場にあったことである。つまり、魂の存在と物質との調和、創造の営みにおける超絶者への信念に基づく科学論が、ボルテールや百科全書学派の学者達によって脅かされることなく、安全なまま生き残ることが可能な状況にあったということである。

J. ラスキン(1819~1900)と同様に、ソシュールの生いたちは極めてピューリタンのであったが、両者とも例外的とも言える成熟性と柔軟性によって宗教的狭量さに陥いることから次第に逸がれていった。1858年以降のラスキンにみられる「改宗」は、たとえソシュールの自然神学が時代遅れとなっていたとしても、事物の個別性と自然に対する率直さを評価するソシュールへの傾倒によって導かれたものであった。ラスキンはソシュールの自然への接近の仕方を好ましく思ったのは、他でもない、それが彼自身のものとしていつの間にか身に付けていたからである。「私が行きたいと望んでいたように、彼(ソシュール)はアルプスへ行き、それをあるがままに見て記述し、自分自身よりも、科学よりも、いや、いか⁽¹⁾なる科学論よりもアルプスを積極的に愛した。」

ラスキンが初めて読んだソシュールの『アルプスの旅』(1779~96)が彼のアルプスの持つ徳の発見への引き金となり、以後、ワーズワスの熱愛する英国湖水地方以上に、崇高な自然のテキストとなる。

.....

突然—ごらん彼方を！我々のうち誰れもその

瞬間、それが雲であると見間違えるものは一人も居なかった。それは氷晶のように透明で、澄み切った青空に鋭くそびえ、すでに沈みゆく夕陽によってバラ色に染まりかけていた。我々がこれまで想い、夢見たものをはるかに越え、たとえあの失われたエデンの園がまのあたりになったとしても、こんなにも我々にとって美しいはずがないほどに……………⁽²⁾

両親に連れられて初めてアルプスを見たラスキンの感動は、ロマンティックなままに、ソシュールの地質学的知識により深まってゆく。なぜならば、「すでにアルプスの光景を地上美の天啓としてばかりでなく、自然の本の1ページを開くことに匹敵するほどに、感動と科学が混りあっている⁽³⁾」からである。ラスキンは科学と感情を相互に排除し合うものとしてではなく、科学は美的反応に確固とした基盤を与えるもの、と考えていた。ソシュールの原理も、19世紀初頭の記述と分類を主とする科学論の例にもれず、理論的実験や歴史的分析よりもむしろ、ひたすら忍耐強く観察することから得られる事物の結果を最優先させるものであった。ソシュールは哲学と宗教とを注意深く識別しながらも、決して、神の世界の非蓋然性を示唆する地点にまで突きつめてゆくことはしない。彼にとって自然の事象の観察は、感じることであり、同時に全く非科学的な表現ではあるが、愛することと同義であった。真の意味での観察は、目にとっての快感を神の真実に導くものであった。従って、分析もしくは情緒的解釈により、真実以上に見ようと試みることは、単なるエゴイズムと見做されるのである。このように、ソシュールの哲学がオーソドキシイの限界内に踏みとどまり、内向し続けたのは、フランス革命に先立つ知的混乱期にあって、科学が無神論やアナキーと手を携えて来はしまいかという恐怖を打ち消す必要があったからかも知れない。さらに、依然として、自然のマニユスクリプトのなかで明確な神の言葉を読みかつ信じようとする人々にとって、地質学とはまさに、知識の追求は神聖なものであることを証明する格好の道具立であった。

ラスキンの青年時代、つまり19世紀前半の科学論は、すんなりと彼の性向に合致した。山野を歩き、スケッチし、収集し、分類し、それらの究極の目的が詩人と同様、神学者のいずれの立場にも共鳴しながら、宇宙の聖なる秩序において神の栄光を顕現させることにあったからである。しかしながら、19世紀の後半以降、科学はこれまでの記述と分類の枠組を越え、幾多の科学的発見、発見の加速に同調するかのようにより絶対者に仕える「理性」を失った盲目の力によって支配される、これまでとは全く異った世界に踏み込んで行った。分析と実験にとって代られた科学は、当然のことながら、詩人の楽観主義と神学者の信仰のいずれも脅かしはじめる。

しかしながら、こうした「科学」に起った変化に対するラスキンの抵抗のなかにこそ、単なるソシュールの科学へのこだわり以上のものが伺える。つまり、彼の正統派神学に対する精神的支柱の重要性が浮上してくるのである。すべての思索も分析も捨てて、ただひたすら、自分の目で眼前の事実を直接見ることが、ラスキンにとって「科学」なのであった。「我々はすべての理論が止ったところから、そして、観察が可能⁽⁴⁾なところから開始しなければならない。」従って、鉱物の外的特性が重要なものであって、内部構成である「化学」的知識の介在は退けられねばならない。こうした科学的方法論の限界はともあれ、こと地質学に関して言えば、地球の構成の視覚的特徴と形態を正確に教えてくれる科学として、地質学は画家に対してもとてつもなく大きな手掛りと主題を提供したのである。

ここで、いま一度、ラスキンが『モダン・ペインターズ』に着手した頃までの主な自然神学について俯瞰してみよう。英国の初期地質学を弁護し、育てて行った根底には、William Paley (1743~1805)らによって展開されたモラル論争があった。彼らの基本命題は、ある特定の明確な目的に機能する部分から構成されるものは、すべて創造主を内在する、というものである。たとえ、成長の正確な歴史的データを欠いていたとしても、我々の外観を主とする議論を決して損うものではない。時計仕掛けのような人為的産物の場合

はその意匠が明白であるように、そのメカニズムの複雑性、精妙さ、面白さにおいて、すべての人工性を凌ぐ自然の力においても、一層明瞭な神の配剤が認められるはずである。彼は、動物、植物、人間に代表される、自然に顕現する神的属性を網羅、記述する点において、基本的には反科学的なままであった。彼が用意周到に科学のテクニカルチームを避けるのも、不可解なもの理論化と分析にどっぷりと侵している人々は、応々にして、自明のことや日常的なもの意義を見落すものだという警鐘なのである。ペーレーは初期アルプス地質学者と同様に、日常の観察行為のもつ徳を強調する。「すべての主題のなかで、最もありふれた観察態度が一番である。これまでありふれたものにし続けてきたところのものこそが、まさに真実性を証明するのであるから。」⁽⁵⁾「道化が舞台の卵の中から飛び出すと子供が驚くのよりも、はるかに、哲学者にとって、ニワトリが孵ることは大きな驚きであり、又、そうでなくてはならないはずである。」⁽⁶⁾

スペキュレーション インスペクション
ペーレーは内省化よりも内視の方に重点を置き、外観と類似の議論を展開してゆく。従って彼の『自然神学』(1802)は、体系的な科学論でもなければ、又、一貫した論理的著述でもない。単一の因果律に基づき、予見的蓋然性から書かれた、いわば、自然の祭壇に献げられた一冊の祈禱書のようなものである。何はともあれ、自然の営為は熟視されることのみを待っている。そして、世界は寺院であり、人生は絶えることのない祈りの行為そのものなのである。⁽⁷⁾ペーレーのこうした科学と宗教との平和な結婚は、その背後において、両者の慎重な区分が行なわれていたからこそ続けられたとも言えよう。自然現象の説明のためにアルプスに登ることと、それによる種の区分、発見、そして神聖化することは、ひとまず切り離された行為であるとの了解が必要であった。ところが、こうした科学のアマチュアリズムによって維持された宗教と科学の蜜月時代は1830年代をピークとし、William Buckland (1784~1856) の、ブリッジウォーター一論文の出版(1836年)あたりから、地質学の専

門化は自然科学の他の部門と同様に、地質学を幽き夕暮れの中から白昼へと引き出す形になってきた。つまり、くだくだしい思索を退け、空想の領域から事実の世界に連れ出された地質学者は、はたして、哲学的帰納法を基盤とする「秩序」という科学的結論を導き出すのである。

ペーレーと同様に、バックランドも、秩序への欲求を満足させる総括的な自然観を求め、そのためにはあらゆる偶然性の排除が前提とされた。一個の石ころも、その「石の教訓」を積みとるために、科学的吟味の対象物として、配剤の定めるところの正しい位置に並べられる。ペーレーが物象の秩序をその歴史的過程を辿ることなしに確立しようとしたのに対し、バックランドは、地質学的時間の概念に備わる有限性を逆手にとって、その歴史性をプロセスとしてよりもむしろ、その産物として扱っている点に注目すべきであろう。彼は、地質学者の活動を古文書の解読作業に喩え、彼にとって自然はすでに書かれたミステリーにみちた歴史の本に等しかった。すべての地質学上の発見は彼の可視的証拠物件に対する絶対的信頼によるものであり、それらの神聖さに関する索引をひもとくためのマスターキーは地質学者の手の中にあった。ところが、宇宙の全能の作家によって、永遠の丘の上で印された自然の活字本は、すべての人間に開かれているにもかかわらず、それを読むことの出来る人間はごく僅かしかいないのである。

地形の外観と対峙し、その謎を解く、いはば自然の記録文書係であるバックランドの作業の本質は、ひたすら、地質学的発見と聖書との整合性の獲得に關っていた。その結果、神学者バックランドはテキストとしてのバイブルそれ自身の権威性の論証に立ち帰ったのである。たとえば“beginning”という言葉を比喩的に読むことにより、聖書が書かれたことの動機付けを行うことが出来るのと同時に、地質学者にとっては、地表の最後の大異変、つまり「ノアの洪水」に先立つ不明確な時期を、たとえ聖書の範囲内とはいえ、納得のゆくやり方で証明することが可能となるのである。バックランドの論旨は、信念がいかにアプリオリなものであろうとも、それ

が説得力を持つためには必ず経験的でなくてはならず、理論対理論から導かれた説明がいかにも理に叶ったものであろうとも、それは結局、人間の至福に反するものと見做す。「地球の粗雑で無秩序な物象の動因が何んであれ、地球上の生物、特に人間にとっての未来に対する創造的な知恵と企画を与える⁽⁸⁾」のが地質学者である。このように、バックランドは地質学者を、歴史家として、又、混沌から秩序を導き出す神の代理人に見立てていったのである。

先のソシュール、ペーレー、そしてバックランドにも共通する、地質学者としての不可欠の資質は、事物の詳細かつ忍耐強い観察眼と、それによって得られた事実を包括し、有機と無機、過去と現在をつなぐ大きな秩序の連鎖を作り上げる能力を意味する。限りない個の多様性のなかから種へと発展する比較類推の作業こそが、ラスキンをして地質学を有意義なものとして認めさせたところのものである。一つの骨の化石から、動物の骨格へ、さらに、地球それ自体の構造へと推論の階段を登ってゆく。この場合、各部分が全体(秩序)であること—ちょうど 'Individual' の意味が、これ以上分割されることの出来ない「全体」としての「個」であるように—の理論が、ラスキンの芸術や詩の有機体論へのアナロジーとして適用されてゆく。

ラスキンが、1837年、オックスフォードのクライスト・チャーチに入学した時の、地質学の講師がバックランドであったことを思えば、彼の地質学的観察の根幹にバックランドの影響を認めるのは自然なことである。ブリッジウォーター論文の中に述べているように、「理知ある人は決して、自然界の現象が神からその起源を発していることを疑ったりはしない、又、聖書を神の言葉と信ずる人は、決して、神の言葉と神の業に関する発見との間に起るズレを恐れる謂れはない。⁽⁹⁾」バックランドは実に巧みに聖書の意味を事実⁽⁹⁾に適合させていったのである。そこには、自然は慈悲深いもの、この世の善き部分は進んで享受すべきもという楽観的な自然現象の自己肯定の理論が大前提となっていることは言うまでもない。なるほど若い頃のラスキンは、神が

最終的に人類の創造を通して自らの意志を表明される以前の「その始まり」においても、世界の諸要素はすでに秩序正しい型態となって存在していたのかも知れない、といった説明を素直に受け入れていた。しかし、科学的事象が、聖書の文字通りの解釈に物理的にあてはまらうはずがなかった。科学を神の言葉に服従させるバックランドの立場は、自然神学が本来依拠してきた自然への率直さ、観察眼を曇らせるばかりでなく、「どんなに取るに足りない、あるいは、軽蔑に値するものにおいてさえも⁽¹⁰⁾」その善性を拡大することが芸術家と科学者の義務であるという極端な論理を生み出すこととなった。バックランドにとって、地質学は神の知恵と慈悲を試すものであった。しかし、それは常に、宗教の補助手段であり小間使いのままであった。

ラスキンが、狂信的福音主義者であった母親マーガレットから神の摂理について長い説教を聞かされたのが、12才の時であった。その教えは主として、C. C. Sturm (1740~1786) のドイツ語からの翻訳で、『日々の自然全体を通しての、神の御業と摂理に関する考察』という本からの引用であった。題名からも解るように、シュトルムの主旨は、自然の営みを事例としながら、神への毎日の感謝の必要性を説くものであった。彼によれば、人間の自然の業に対する無感動は次の5つの不徳によってもたらされている。1) 惰性による無関心、2) 自己愛による私欲、3) 無知、4) 怠惰、5) 無信仰⁽¹¹⁾ がその原因として掲げられる。第1番目については、ペーレーが強調した「平凡なものへの注目」と共通するが、ラスキンはこれを、自然環境における感覚の鋭敏化、特に、視覚の曇りを取り払うことに置き換えてゆく。「普遍的存在としての神の知恵を識るために、わざわざ例外的な出来事に向う必要はない。自然の日々の変化、我々の肉体に起るごく通常的なことがらこそ、知恵と善と力の無限的存在であることを我々に確信させるに充分なものなのである。」⁽¹²⁾ シュトルムは、こうした、読者の目を窓ガラスの霜、落葉の柄、道端の小石に向けさせるのであるが、ささやかな物象への共鳴は単なる隠遁趣味とか

宇宙観の縮小を意味するものではない。むしろその反対に、日常的なものへの愛や共鳴の論理は大いなる存在とのアナロジーもしくは対比の論理なのである。従って、小さな花への愛着は広大なアルプスの山の崇高さと共時的に体験されるものであり、究極的には神への愛へと高められていっても不思議ではない。シュトルムは特に、知覚を研ぐための手段として「対比」の理論を主張する。ラスキンはこれをターナー弁護の色彩の効用に関するところで、「闇は光の価値を教えるという命題」を発展させ、「ターナーの激しい光は隅々の色彩も際立たせる」といった具合に転用している。ターナーは「芸術によって自然の豊かな濃淡を表現し切れないことを知っていたが故に、これまでの人々が光と闇を隔てるために好んで用いた黄金色の代りに、純白を用いた。つまり、ターナーは、色彩の曖昧かつ余剰な効果を控えることにより、自然の真実に近づけたという点において正しいのである、とラスキンは考えた。言い換えると、「対比」の論理は物理的宇宙と道徳的地上とを縦につなぐ原理である。すべての自然が人間にとって善なるものへと指向すると考える人々は、悪の存在といえども人間の本来の貴さを高めてくれるものとして認知し得るのである。

霧はルター以前の知的暗黒を、潮流は生命の躍動を、石ころだらけの道は頑な心を、といった具合に、シュトルムは自然と道徳を1つ1つ合致させ、そこに生まれる「自然のモラル」の連鎖の基調となって聞えてくるのが、“All is vanity”であった。冬の湖でアイススケートに興ずる人々を評した。「この世の悦楽に身を任かせる人間の軽薄さと無分別」以外の何ものでもない⁽¹³⁾。玩具1つ無い部屋にラスキンを閉じ込めた母親マーガレットの聖書教育が、額面通りのピリュータリンの厳格さを持って行なわれたことは想像に難くない。しかしながら、美術批評家ラスキンの資質に深く関っていったのは、自然の仕組みと奇蹟についての畏怖の観念よりむしろ、シュトルム流の自然とモラルのレトリックであったに違いない。たとえば、耳について。あまり才能のない創造主であったとすれば肉だけから造ったかも知れ

ない。もし、そうならば、上部が垂れて開口部を塞いでしまい、器官としての機能を果さなくなったであろう。又、骨についていえば、その硬さ故に我々が横になると鋭く痛むように出来ているのである。あるいは又、音を聴く能力への感謝の気持ち起させるため、神以外のいったい誰れが聾を造ることなど考えられたであろうか。⁽¹⁴⁾これらの素朴な運命論的レトリックの今日の我々の目から見たナンセンスはさておき、シュトルムの『考察』は、ソシユールやバックランドのなかでは決して見い出せなかった、自然の秩序の不変性と人間的知識の必然的限界とを衝激的なまでに生々しく開陳してみせたのである。太陽の光の下では新しいものは何もない。否、自然においていかなる「空虚」も存在し得ないはずである。この偉大な連鎖の枠組のなかで、仮りに動きというものが認められるとすれば、個々の種がその秩序に従って自らの完璧へと昇る、音のない変化を言うのであろう。『モダン・ペインダーズ』の1、2巻までの段階では、自然の秩序の完璧さと人間の表現行為の不完全さについては、重要な確認事項として、大きな変更理由は見当たらない。しかしながら、ラスキンはターナーの中に認めた天才性である「科学的」観察と正しい表現とは、「特異な、明確な、完璧な美」の表現能力を示すところから判断して、続く第3巻、4巻に見られるラスキンの不完全なるが故の人間性礼讃への「改宗」をある程度予測出来るように思われる。ターナーの作品を粗野で特異な想像力の副産物として攻撃したJ. レイノルズの追従者に対する反撃で最も注目すべき点は、自然から遊離した抽象的概括からは、風景画の中の「個別的」なるものも、まして「完全なる存在」へも一歩たりとも近づくことは出来ないと主張した点である。芸術行為においていかなる意味においても完璧なるものはあり得ないのであり、特異なもの理想的な形に向わせるのがターナーの「科学性」である。ラスキンは設定した理想的なるものへの階段は、自然生態と環境の間のピリュータリ的な労働観、つまり、その指定された環境のもとでその種に寄せられる生へのあらゆる期待に応えるこ

とによって、「完璧なるもの」への存在に至る道標でもあった。「すべての草花、木々には理想的な形がある。その形へは、各々の『種』が事故や病気の影響下にありながらも達しようとするのである。¹⁶⁾たとえば野性の檜木は、「ふしくれだち、反り返り、崩れ、岩に阻まれながらも、理想的なのである。こうした不幸にもかかわらず、檜の尊厳を保っている。……その努力、闘い、忍耐力、耐久性、必要なものを得る技能性によって、幸運な状況下においてよりも、よりその特性が引き出され、檜本来のものが表現されるのである。¹⁷⁾

このように、整然と配置された種のハイアラキーの内部において完璧を指向するラスキンの自然史論は、美学のみならず政治経済論へと分岐発展してゆく。彼は、自然物の本質を正確に表現する能力をターナーの絵から学んだと述べながらも、常に、芸術行為のなかには主観的な観察者と客体の間に低級なやり取りが行なわれる可能性が潜在的にあり得ることを警戒している。たとえば、宇宙を神が考案した第一級の時計に置き換えたとしよう。その場合、自動巻きの複雑な機械操置のデザインの主を誰にするかという段になると、機械論の周辺が急に慌しくなってくる。『モダン・ペインターズ』の初期の議論において、ラスキンは分類法と目的論とを適度に組み合わせながら、冷酷な唯名論と唯我論的印象主義の両極に歯止めをかけている。「美しいものや崇高なものの感情を分析、証明したり、すべての光景の個別的特徴を観察したり、神がすべてのものに押した、無欠の、人知の及ばない絶えることのない好ましさに対し出来得る限りの光を与えるためには¹⁸⁾、まず第一に、神の指で描かれた自然の地図を広げ、それから、自然の物象を観察したその目で、人間の精神と心の働らきを見なければならぬ。17年間にわたる『モダン・ペインターズ』全4巻のなかで、ラスキンが、現代の画家の方が古代に優る、と結論付けた理由は、彼らの目的である「神の業の完璧さと不変美」を表現し、しかも、「人間のすべての所作がそれと一致、もしくはそれに従っていること¹⁹⁾」を実証することが出来たからであった。

目に映る実り豊かな構成物が、忍耐強い観察眼によって、磨き抜かれた体系へと導かれるのは、決して、概括行為による知的操作ではなく、まさしく、外的事象への、神を消失点とする遠近法によってであった。

.....

ハイゲート・ヒルの頂きへ、晴れた夏の朝5時に出かけ、そして、ウェストminster寺院をごらんください。あなたはそこから、無数の垂直線によって豊かに飾られた建物というイメージを得ることでしょう。縦の線を1本ずつ次の線と区別してごらんください。出来ないはずですよ。それを数えて下さい。出来ませんね。その線の始めと終りを見別けられるかやってみて下さい。これも無理です。では、それを全体的に見てみなさい。それはすべて対称的配置となって見えます。各部分についてそれを見て下さい。すると、それは抜き差しならぬ混乱となります。今の私は、自然を表現するのと同じ言葉で、ターナーの1枚の素描について語っているのではないだろうか。²⁰⁾

.....

ラスキンは偉大な絵の基準として、無限なものが表現されているか否かを問題にした。こうした考えに立って、はじめて、「無限の精神の怠むことも尽きすることも知らない活動の証人²¹⁾」として我々は自然に接近することが出来るのだから。しかし、芸術は自然を模倣するものではない。自然を愛する芸術家は、自分の描いた風景の無限さの減茶苦茶加減を、よく思い知らされているものだ。「彼は、芸術が自然を真似ることは出来ないのだということを身を持って教えてくれるでしょう。よしんば真似ている風に見える場合には、その芸術は自然を侮辱し、嘲っているにちがいない。彼は自分の力の枠内で完全にそうした真実を君に与へ、述べるであろう。彼が与えきれないものについては、あなたの想像力に委ねられよう。もし、あなたが自然を知っておれば、彼の与えるものが真実であることを知り、そして、あなたの記憶と心から、

彼が与えられなかったその光を与えるでしょう。²⁸⁹

ラファエル前派が目指した正確な細部表現に対するラスキンの評価からも解るように、彼はアルプスや大海の広大な力を真似ることの難しさを特に強調する。自然の不滅性、持続性、完璧性といったものは、芸術の表現の次元に限って言えば、自然の作品と芸術作品の間の相異を指摘することによって知るより他はないのである。表現それ自体が目的化されるのではなく、解釈の手掛りとして、自然の印象を観る者の想像力に働きかけるように仕向けるだけなのである。従って、芸術家は地質学者に学んだ自然観察とその表現を有意義なものとするために、まず「自然と科学的かつ全面的に交わらねばならぬ」²⁹⁰のである。風景画の再現的忠実さと科学的法則はある点では一致するものの、芸術的創作プロセスの評価のうえでは、一切の機械論的な議論は排除されるべきである。又、忠実な再現性の賛美と散文的な形成主義への批判の意味するところは、芸術家は自らを隠さねばならないということである。「もし感情の興奮について我々の理屈が付くようなものであれば、本当の感動は起らないはずである。」我々の心が釘付けにされるのは、主題によってであって芸術家の術においてではない。「我々は彼が見ているように見ている。しかし、我々は彼を見ているのではない。」²⁹¹我々は、事実、芸術家に払うべき最大級の敬意は、彼を忘れることなのである。

ラスキンの伝達行為としての芸術観と、バックランドの神の手稿本としての自然観の間には、幾つかの類似点が見い出される。「もっとも高度な思想とは、その表現手段にもっとも依存するところの少ないものなのである。」²⁹²神の秩序を知るために必要とされるのは、結果に対する直観主義とそれを統括へと導く集中力とである。又、「絵画、もしくは芸術一般は、その技法、難解さ、特殊目的があるとしても、思想の伝達手段——それ自身は無に近いものだが——として計り知れない価値のある、高貴な表現性を有する言葉以外の何ものでもない。」²⁹³バックランドと同様に、自然は一定の明確な法則に従って機能すると信じていたからこそ、「絵画は読まれるべき

もの」という芸術観に達するのである。ラスキンが地質学から学んだ知識が、真の意味で生きてくるのは、それをアナロジーとして芸術に適用する時である。彼は山の成立と人間の解剖との類似をもって地球の真実について語る。筋肉の動きが人体に及ぶのと同じ関係が、「地球の本体」とその他の部分との影響関係にあてはめられる。平野や低い丘は、肉体の「休憩と静止」と同じものである、といった具合に。²⁹⁴ラスキンが『モダン・ペインターズ』の中で利用した自然史の区分法式なども、あくまでも修辭的手段として用いたものであった。従って、ターナーの『ティーズ川上流の滝』を前にして、たとえば地質学者のように浸食の全過程について講義をしたり、あたかもそこに立ってしぶきで濡れるかのような直接的説明をすることは、芸術の本質的な価値とはならないのである。「この偉大な画家が、こうして自分が描き出した地質学的法則によく通じていたと主張する気は全く私は持っていない。私は単に、証明可能な点において、非現実的で曖昧な表出としては示し難い真実への激しい観察と厳格な執着を見せたいだけである。いかに私がすべてのタッチと線の真実性を感じることがあっても、大きな一般的様相の枠以外では真実を証明することは出来ないのである。」²⁹⁵自然法の扱いについて、それを大胆に用いるだけの権利が芸術家の手に委ねられている。そして科学の客観性は、忍耐強い観察と、自然への長い時間を通して育てられた親しみと祈りにも似た思慕の気持ちによって鍛えられてゆかねばならない。つまり「直接、自然へ」というのが、ラスキンの最高のマニフェストである。「訓練された目と森の中での生活は、すべての植物学的知識よりも価値において優る」²⁹⁶のであり、又、「ずっと以前から、見、感じ、愛してきたもの以外は、いかなる人もそれを良く描いたり、又、今後も描くことは出来ないであろう。」²⁹⁷

確かに、『モダン・ペインターズ』の初期の2巻については、自然神学がともすれば陥り易い自己矛盾の罠に、ラスキン自身があえて向って行こうとする点が多く見られる。つまり、読者に対しては自然法則の合理的論証を展開してみせながら、

一方において、その法則に関する知識が神の不可知性を信ずる心を上回ってはいけないという理由で、常に放棄される運命に置かれている。別の言い方をすれば、明析な科学的判断による操作は、キリスト教の天啓とのアナロジーもしくはレトリックによって、知的抽象化からも感情的ひらめきからのいずによっても卑められることのない直観主義へと導かれなくてはならない。ラスキンはメタファー制作において、唯一、自然に対する人間的限界性を肯定的に捕え返すことができたのである。従って、ターナーの創意性を神格化の危険性に至る寸前まで賞賛し得るのも、彼のひらめきを無視せぬ程度まで風景のナチュラルリズムを強調出来るのも、結局、神の伝言の意味を減ずることなく表現する、一人の自然史家ラスキンの視覚的想像力によるものであると言えよう。

.....

彼（ターナー）は高台に立つ。そこから彼は神の宇宙を振り返り、そして、人類の世代を見はるかす。さあ、彼の手になるすべての作品を人間の歴史とし、又、神の教訓としよう。彼の大いなる精神のはたらきを賛美歌と予言に、そして、人類への啓示、神意への賞賛となそう。³¹⁾

1845年の北イタリア旅行により、「自分の人生は岩と雲の習作だけにもはや費されてはならぬ³²⁾と決心したラスキンは、これまでの神によって造られた「現在の私」'I am' から人間として「成りつつある私」'I become' への転向を開始する。そして、40年代の後半以降のラスキンの芸術観の基本は、神の配剤としての自然の予表を見ることから、人の技、人の心のダイナミズムをいかにして見、かつ、読むかということに絞られてゆく。

注

- 1) John Ruskin, *The Works of John Ruskin*, ed. E. T. Cook and A. Wedderburn (Library Edition, 39 vols., London George Allen, (903—12). 6:476以下.Worksと略する。
- 2) *Ibid.*, 35:115.
- 3) *Ibid.*, 35:116.
- 4) *Ibid.*, 26:112.

- 5) William Paley, *Natural Theology or, Evidence of the Existence and Attributes of the Deity, Collected from the Appearance of Nature* (London:Printed for H. Faulder, New-Bond-Street, by Wilks and Taylor, Chancery-Lane,1802), P.386.
- 6) *Ibid.* PP. 328-326.
- 7) *Ibid.*, P. 576.
- 8) William Buckland, *Geology and Mineralogy Considered with Reference to Natural Theology*, 2 vols, (London, 1836), P.44.
- 9) *Ibid.*, P.9.
- 10) *Works.*, 3:483.
- 11) Christoph Christian Sturm, *Reflections on the Works of God*, 3rd ed. 3 vols. (Dublin : Printed by William Jones, 1790). III, 68-70.
- 12) *Ibid.*, I. 24.
- 13) *Works.*, 3: 269-270.
- 14) Sturm, *Reflections* I, 68.
- 15) *Ibid.*, I. 266.
- 16) *Works*, 3:27.
- 17) *Ibid.*, 4:170.
- 18) *Ibid.*, 3:48.
- 19) *Ibid.*, 7:9.
- 20) *Ibid.*, 3:336.
- 21) *Ibid.*, 3:381.
- 22) *Ibid.*, 3:289.
- 23) *Ibid.*, 3:403.
- 24) *Ibid.*, 3:22.
- 25) *Ibid.*, 3:89.
- 26) *Ibid.*, 3:87.
- 27) *Ibid.*, 3:427-428.
- 28) *Ibid.*, 3:465-466.
- 29) *Ibid.*, 3:586.
- 30) *Ibid.*, 3:229.
- 31) *Ibid.*, 3:611.
- 32) *Ibid.*, 4:348.

[昭和58年12月20日受理]